126種類のカラー写真に，簡単な説明が付けられている．

虫こぶと言っても，その形成生物はハチ，ハエ，ガ，アブラムシ，ダニ，キジラミと多様で，それぞれ独特の虫こぶを作る．写真は寄主植物の分類順（牧野新日本植物図鑑準拠）に並べられており，サイズはB6版と手頃なので，われわれ植物屋にとって使い易い．植物をやる側がこういうものの知識を持てば，虫屋さんとは違う発見があるのではないかと思う．たとえばヤドリギの種類と寄主との関係のように…．あるいは形態形成刺激物質の探究とか…．虫こぶ命名の原則は「植物名＋形成部位＋形＋フシ」だそうで，たとえばブナハマルタマフシの形成者はブナマルタマバエである．虫こぶで名高いイスノキでは，5種類もの異なった虫こぶが示されている．同じ著者の「虫こぶ入門」（八坂書房）は，本誌71巻235頁に紹介した．（金井弘夫）

□森　和男：**誰がスーリエを殺したか1．** みねはな（50）：122–203．2003．

みねはな会は関西を本拠とする山草同好会で，このたび創刊50年記念号（273頁）が刊行された．多くの記念投稿の中から，東亜植物に関係の深いプラントハンター J.A. Souliéについての表記の一文を紹介する．森氏は丹念な文献探索に加えて，度々の現地調査を行った結果を，彼独特の筆致で記述している．長い前置きの中では，文中に登場する29名もの人物（日本人では雲南奥地で殺害されたと言われる能海　寛を含む）の簡潔な紹介，関係地名，政治情勢，当時の報道など，たくさんの情報が記述され，これだけでも当時の情勢，とくに西欧列強の進出に伴う現地の動きがわかる．

文末に四川・雲南・チベット辺境地区年譜（1624–1914年），利用した文献一覧がある．欧米関係文献の原典は少なく，それらの訳本はかなりたくさん参照しているが，むしろ中国内の文献を多量に利用し，日本国内の出版物を併せて用いている点，自分らの都合のよいように記録された欧米出版物からの翻訳による偏向を排除しようという，著者の気の入れ方が一通りではないことをうかがわせる．まだ続きがあるはずなので，期待したい．みねはな会の会誌関係連絡先は616-[redacted]京都市右京区[redacted]内藤登喜夫氏へ．一部2,500円（送料は別）とのことである．なお本号には里見信生氏，久保田秀夫氏の追悼文，1–50号の著者別総目録（約1600件）も含まれている．（金井弘夫）